

あたし真風羽華代。夕  
バコ吸えなきや地球滅  
ぼすんで。何ヒ一  
口一つて？ 勝手に決  
めんじゃねえよ死ね死  
ね死ね  
やまいこ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

めんでえ、めんでえ、めんでえ、めんでえ、めんでえ、めんでえ、めんで  
え。

めんでえ、めんでえ、めんでえ、めんでえ、めんでえ、めんでえ、めんで  
え。

めんでえ、めんでえ、めんでえ、めんでえ、めんでえ、めんでえ、めんで  
え。

『間違った子を魔法少女にしてしまった』(c) 双龍

目

次

N N N  
o. o. o.  
0 1 みゆ  
0 2 みゆ  
0 3 みゆ | 知るかよ |  
| 条件がある |  
13 1

26



# N O . 0 1 みゅー タバコ

人は生まれながらに平等じゃない。

事の始まりは――

「長えよゴミ」

無感情に紡がれる言葉と同時に繰り出される拳。

人に向けて放つてはいけないレベルの殴打は――しかし、彼女に『魔法少女』の力を授けた小さき存在に向けられた。

それは体長二〇センチメートルほどの生き物。地球上には生息していない未知の存在――

名前は『ミユ』という。語尾もミユである。

猫の様な――

犬の様な――

背中に白い羽が生えている不思議な生物。

人語を介する以外は謎としか言いようのないもの。それが――今しがたコンクリー

ト堀に穴をあける勢いで吹つ飛んでいった。

それを成したのは女子高生悲劇としか言いようがない何処にでも居そうな人間だ。

見た目にも可愛いと言われる類たぐいであり、決して筋骨隆々の筋肉ダルマではない。

学校指定の制服を着用し、時より吹く風によつて白いパンツが見えても気にしない。けれども見たものは必ず殺すと決めている。これは男限定である。

金髪ドリルのツインテールでお嬢様風——

清楚な容姿に平均的な太さの手足を持つ可憐な外観。

彼女の名は『真風羽華代』まじはかよという。

ちなみに——名前に反して——成績は非常に優秀である。

それが尋常ならざるパワーを發揮する人間とは到底思えない。しかも『個性』ではなく素のパンチでこうなのだから彼女の本気はどれほどのものか。

「つたく、ここ何処よ?」

学校に向かう途中で『アタスンモ』という悪魔のような外観を持つ化け物と戦ついたら見知らぬ道に迷い込み、絶賛迷子中だつた。

学校をサボれる口実が出来たので別に大して困つていない。お腹が空くまでは——

「そういや小つこいのどこ行つた?」

先ほど吹き飛ばした生物が戻つてこない。数分ほど待つてみたが一向に現れないの

で真風羽は早々に諦める。

居れば居たでうるさいだけだ。いつもは唐突に現れて襲つてくるアタスンモの姿も見かけない。

(……マジここ何処だ? 携帯も圈外みたいだし。つたく最近のスマホは使えねえな)  
最新機種であるスマートフォンを操作するも地図情報は現れず、ネットにも繋がらない。当然、通話機能も――

では何が使えるのか。

(事前にインストールした機能は……ある程度使えるか……。電源入るだけマシか。……  
写真とメール機能だけか? 充電と……、メールの送信は出来んのか?)

送る相手が居ないので真偽を確かめることは出来ない。自宅宛てで試してみたものの――いつもは即座に返つてくる返事も今は一向に無い。

近くの携帯ショップで聞けばいいのだが、その前に所持金を確かめる。と言つてもキヤツシユレスの時代を先取りしている真風羽のサイフはとても軽い。ほぼカードしか無かつた。

現金は持ち歩かない。無ければ寄つてくる――自称――『ダチ』から巻き上げればいい。

そういう生活を続けてきた為、いざという時の対処に困惑してきた。

(……知つてゐるところならまだなんとかなつたのによ。めんどくせえな)

徐おもむろにポケットに手を入れ、取り出そうとしたものは『タバコ』である。

ポケットが空——タバコ以外の事は頭に無かつた——だと分かるやいなや、あからさまに不機嫌ぎょうそうとなつた。それはもう可愛らしい清楚さは何処へやら。今にも人を殺しそうな憤怒の形相で——

「……チツ」

最近は喫煙の規制が厳しくなり、購入もままならない。普段は親が——会社ごと——買い占めたタバコが大量にあつたので新規に買う必要が無かつた。しかし、今は手持ちが無くなつたら購入せざるを得ない。

未成年である真風羽に売つてくれる店は——おそらく——無い。であればどうしたらいいのか——

"Plus Ultra"

当ても無く歩いていると真風羽の嗅覚に反応があつた。それはとても馴染み深い匂

い——タバコのもの——であつた。

反応を探つていると前方から歩いてくる一団を見つける。

服装は何処かの学校の学生服。年の頃は中学生風が複数人。

ガラの悪そうな男子生徒達だ。

「やつぱり爆豪は『雄英高』に行くのか?」

「お前らタバコはやめろつつてんだろ!」

三人居る中で一番の極悪人風の面構えの男子が友人——と思われる——が持つていたタバコを分捕る。そして、即座に手元で爆発を生じさせて隠滅。

思わぬ行動にタバコにロックオンしていた真風羽は驚愕した。

運良く見つけたので平和的に分けてもらおうかな、と思つた矢先の行動だつたので激しい怒りが沸々と湧き起ころ。

自身は認めていないが、彼女の沸点はギネス級に低い。

「……お」

い、と声をかけようとしたところへ別方向から得も言われぬ物体が男子達に襲い掛かつた。

通路は一方通行ではない。真風羽にも死角はある。その死角から現れたのは間違いなく化け物であつた。しかし、この世界では比較的ありふれた存在であることを真風羽

は知る由も無かつた。

襲来者は俗に『敵』ヴァイランと呼ばれる者だ。

『個性』を持て余した人間は正義か悪に分かれる。様々な事情があるにせよ、犯罪行為は容認できない。それゆえに『個性』の乱用は法律で規制されている。これは正義側であつても同じこと。

己の『個性』を正しく使うためには免許が必要である。それを得るために学生達は鎬しのぎを削る。

誰でも得られるわけではない狭き門となつていた。

もちろん、誰もが正義のヒーローになれるわけもなく。はみ出し者が出てくるのは自明の理。

悪側につきたがる者は多くないが正義から零れ落ちた『個性』の使い道は様々であつた。

例えば——一般人に襲い掛かる泥の塊と化した敵などは——

「こいつ……何処から……」

「隠れミノ見つけ」

泥は敵ヴァイランであつた。それが素早い動きで三人の一般生徒に襲い掛けた。

身体は流動的。だが、それでも彼は化け物ではなく人間だ。

姿の変容もまた『個性』の特色である。

タバコを吸おうとしていた男子二名はすぐさま逃亡を図り、彼らを咎めた『爆豪』と  
いう少年は不意を突かれ、泥を浴びる。

敵ヴァイランは流動的な身体を利用し、相手の体内に潜り込んで操るすべを持つ。その能力で  
ヒーローから、警察から逃げおおせた。

しかし――

今まさに一人の少年が餌食になるところだつた、のだが――

流動的で物理的に掴めない筈の身体が不意に動きを止めた。いや、止められた。

「な、なんだ!?

泥の塊にしか見えない敵は振り返る。

そこには悪魔が居た。

正確には憤怒の形相で泥を素手で掴む女子高生真風羽だ。

「……おい。あたしの服が泥まみれなんですけど?」

確かに言われてみれば女子高生の姿は泥水を浴びたように汚れていた。

敵ヴァイランの身体を構成する水分が漏れ出ていたようだ。それが偶々通りかかった真風羽の身体に撥ねたようだ。

「ああ? 今はそれどころじゃ……」

と言葉の途中で泥の敵に襲い掛かる真風羽。

尋常ならざる速度を乗せた拳を仇敵と認めた相手に繰り出す。一拍の呼吸音の後に衝撃波が発生し、爆豪を取り込もうとした泥が吹き飛んでいく。——ついでに爆豪も一緒に。

真風羽はただの女子高生なので器用に相手を選別することは出来ない。

"Plus Ultra"

真風羽のパンチ力の影響によつて泥の敵が近くの壁に叩きつけられる。それはいかなる『個性』なのか。

敵は吹き飛んだが制服の汚れは取れない。

不満を示しつつ飛び散る敵に無警戒に近づく真風羽。

「クリーニング代。……出せ。ついでにタバコもよこせ、いいな?」

「……は?」

得体の知れない相手に敵は一言を発するので精一杯だつた。

何なんだ、この女は、と泥の敵は恐怖した。

新手のヒーローか、と危惧するも自分の知る情報に女子高生の姿は無い。であれば何者だと疑問符がたくさん浮かぶ。

真風羽はポケットに入っていた唯一の所持品であるライターを点け、それを敵の飛び散った身体に当てて炙あぶつてみる。

(なんでライターがあつてタバコが無ねえんだよ。……ライターが無ければ火は点けられねーけど)

このライターはどこの店でも手に入る一般的な物で、特別なアイテムではない。

大部分が泥で出来ている為に熱 자체は然程感じない。けれども容赦のない行動に恐怖を覚える。

「なあ、お前。犯罪者だよな？ 惡人なら殺していい法律になつてんだよな？」

「……いえ、立派な殺人罪に問われますけど……」

「ああ？ てめえのような化けモン殺してなんで殺人に問われるんだ？ この国の法律はいつ改正したんですか？」

と言いつつこめかみに太い血管を浮かべ、睨にらみを利かせて威圧しながら恐喝する真風

羽。

ある意味、ヴィラン敵以上に恐ろしい人間と言える。

今もどこか潰せないかあちこち殴つたり、踏みつけたりしていた。そして、失敗する度に舌打ちする。

これでも真風羽はれつきとした魔法少女である。

攻撃方法が己の肉体を使つた物理攻撃技は格闘ゲームで培つちかつた。なだけで——  
敵ヴァイラン側も言われつ放しではなく、反撃の機会を窺つていた。しかし、何故か、流動する

肉体を平然と掴む真風羽から逃げられない。

(液状を掴む『個性』か? 衝撃波ヴァイランが出る攻撃に説明がつかん)

緊急事態の為に思考が定まらない敵ではあつたが危機回避能力に秀でていた為、無暗な深入りは危険だと感じ取つた。

とにかく、この女とこれ以上の問答はヤバイと——

だが、逃げようにも万力で固定されたかのように動かせられない。

女の細腕如きと頭では思つてゐる。それなのにだ。

(手持ちにタバコがあれば……。だが、あつたとしても俺の身体はヘドロだ。すぐに駄目になる)

自身の『個性』を今ほど悔やんだことは無い。

タバコ以外に金だが——こちらも逃走中に落としたようで大して残つていなかつた。

今頃大半の金を——  
敵ヴァイランを追跡している別の『ヒーロー』連中に——回収されている筈

だ。

"Pilus Ultra"

相手が何も持つていないと感じ取った真風羽は泥で崩れている顔らしき部分を徐に掴んだ。それだけで液状化していた相手の身体が元の人間風に形作る。敵といえど元々は人間として生まれた。それが『個性』の発現と共に、歪に歪んだりする。

先天的。後天的。遺伝的。

要因は様々だが地球の総人口の八割は『個性』持ちと言われている。ヘドロ状の敵もその中の一人だ。

「金が無くてもクリーニング代だ。さつさと持つてこいゴミクズ」

(……俺達より悪人面してやがる。本当に女子高生か?)

敵は真風羽から解放された途端に逃げようとした。しかし、そのあとすぐに回し蹴りを食らい反対方向の壁に激突する。

液状化した肉体に平然と物理的に攻撃してくる女子高生に戦慄を覚える。それと自身の丈夫さは運がいいのか悪いのか——  
敵の襲撃から救われた爆豪はただただ雰囲気に圧倒されて黙つて見ている事しか出来なかつた。

# N.O. 02みゅー 知るかよ

唐突に襲われた爆豪少年はしばし呆氣に取られていた。

よく分からぬ女子高生が自分を救つたかと思えば泥の敵（ドロヴァイラン）を圧倒している。それは

本来ならば自分がやるべき仕事の筈だった。

同年代であれば絶対に譲れない矜持を示しているところ。

それなのに圧倒的ともいえる存在感によつて普段は——偶然と併むこと——しない失態を犯していた。

(なんなんだ、こいつは)

その言葉が何度も内に湧いては響いていく。

まず彼がしなければならないことは助けてくれたことに対する謝礼である。しかし、自尊心の塊ともいふべき爆豪にそんな気持ちは皆無に等しい。

ただただ自分の出番を奪つた相手が許せない。こいつは俺が倒すべき敵だ、と。  
——いつもであればすぐにでも突つかかっていくところだ。特に知り合いであれば尚更だ。

(……どうして液状化した身体を掴める？ それが奴の『個性』なのか？)

表情は怒りに近いが内面は至極冷静であつた。

状況分析も大事だが対処法を自分でも考えておく。それは無闇矢鱈に攻撃ばかりする性格ではなく、敵に負けないように自身を研鑽することを忘れない――

それは自分が『ヒーロー』になるために必要だと思っているからだ。

大事なことは相手に負けない事。勝つのはついでだ。

自分の能力の弱点くらい把握している。それが爆豪少年であつた。

"Plus Ultra"

先程から敵ライバルを圧倒している女子高生『真風羽華代』は今まで見たヒーローの中には居ない。それは単に見かけたことが無い、という意味でだ。

能力自体は至極単純なインフアイト系。  
接近格闘

特殊な光線やら飛び道具類は見かけない。

(油断はしたが爆発の能力が通じねえ相手でもねえ。……しかし、取り込まれていれば

ヤバかつたのは事実だ)

外見的には向う見ずに見られがちだが爆豪は反省できる人間だ。それが発揮されるのに少し時間がかかるだけで。

「金が無いならおまわりさんが来るまで大人しくしてもらおうか。あたしの服を汚しておいてさようならは常識を疑つちやうなーああ?」

凶悪な表情で敵（ライラン）を脅す女子高生。

威圧感はあつたけれど恐怖するほどではないと爆豪は判断する。

彼女の目標はあくまで敵（ライラン）だ。自分ではない、と。

「適度に痛めつけておかねーとなあ、おい」

ガスガスと泥を踏みつける。

いくら物理的な攻撃とはいえ大して通用しないのでは、と思ったものの反撃は今のところ無い。効いているのかは疑問である。

先程から敵（ライラン）が呻いてばかりで会話が成立していない。

黙つて見ているだけではいけないと思い返した爆豪は近くで様子見をしていた一般人に警察などを呼ぶように言つた。

それから程なく『プロ』ヒーロー公的に『個性』を使用して活動することを許されたヒーローのこと。活躍内容によつて国から資金。人々から名声を得る事も可能。が現

れる。

駆けつけたヒーローと警察機関によつて現場検証が行わられる時、爆豪は目を疑つた。

先程まで暴力の権化が居たはずなのに今はどこにでも居そうな可憐な女子高生しか居ない。

真風羽は素行に問題はあるが敵が居なければとても大人しい子である。ただし、タバコを吸つていなければ防波堤は簡単に崩れ去る。

「ちょっと。この人のせいで服が汚れたんですけど。クリーニング代は誰が出してくれるんですかあ？」

（あとタバコ吸いてえ。めっちゃタバコ吸いてえ。ヤニタイムはもう限界に近い）

「んっ？ そういうのはちょっと……」

「暴力を受けたり、辺りの損壊程度によつては保証金が出るかもしれないけれど、单なる衣服の汚れは……自己責任かな」

「チツ」

真風羽のあからさまな不満にヒーロー達は苦笑した。

警官の方は素行の悪そうな女子高生の態度に不満を覚えつつも淡々と仕事をこなしていく。

この世界の警察は『個性』を悪用する敵になすすべがない。基本的に同じ『個性』を

ヴィラン

用いるプロヒーローの助けが必要であった。その事もあって警察は世間から『敵受け取り係』と揶揄されている。

“Plus Ultra”

事情聴取をしようにも不満顔の真風羽に恐れをなした警察。同じくプロヒーローも近づき難い印象を持つた。

かといって事件を起こした敵<sup>ヴィラン</sup>を撃退した人間を黙つて返すわけにはいかない。プロヒーローは『個性』を公的に使用する免許を所持しているから問題は無いが一般人で敵<sup>ヴィラン</sup>を撃退する者が『個性』を持っていない筈が無いと思われた。無免許であれば——場合によれば——検挙しなくてはならなくなる。

それから——真風羽よりは素直な爆豪が分かる範囲で応えていたが、彼もやはり謎の女子高生の存在を気にしていた。  
 （……不本意だがこの女は強い。しかも何らかの『個性』を持っている気がする。態度から俺達の事なんて眼中にね——ようだが……）

『敵受け

そもそも爆豪を助けようとしたわけではなく、偶々彼女の服を汚したから敵を撃退した――

そう考えれば単なる正義感で敵を<sup>ヴィラン</sup>圧倒する存在に怒りよりも興味が湧く。

自分の知るど<sup>たまたま</sup>のヒーローとも違うようだし、もしかすれば別の地方から出てきた『ヒーロー志望者』かもしれない。

(……だが、情けねえ姿を晒しちまつた。今の俺じやあまだ力不足なのか……)

爆発力には自信がある。だが、ただ単に飛び散るだけでは駄目だと思い知った。相手はそんな事でも動じないタイプだった。であれば次はどうするのか――

爆豪は過信しない。

己が一番のヒーローとなる為に。憧れの存在に認めてもらえるように――いや、それ以上の存在となる為に。

強い想いを抱く彼とは対照的に真風羽はイライラを募らせていた。早くタバコが吸いたい、と。

一向に開放してくれない事で真風羽の顔は少しづつ険悪になり、地面にヒビが入つていく。それを宥めようにも彼女の機嫌は直らない。

一見、不良娘の様な彼女だが警察や法律を――一応――遵守する気持ちがある。  
無闇矢鱈と喧嘩を売らない。けれども売られた場合は倍以上にして返す。

『アタスンモ』なる化け物は問答無用で肉塊にするほどだが。

「君の言う住所が全く見当たらないんだが……」

「知るかよ、クソポリ公が」

そう言つて地面に唾を吐く真風羽。 もはやいつ怒りが爆発してもおかしくない。

最初に見かけた時よりも邪悪な顔に変化し、 爆豪は一步後ずさる。 いや、 他のプロヒーローすらも。

“Plus Ultra”

真風羽は聞かれた質問に全て答えた。 それなのに警官は疑いの目を向けている。

あまり信用されていない事は自覚している真風羽だが犯罪者を捕らえた自分を長時間拘束してくる警察のやり方が理解できない。

先程から言葉の端々に出てくる『個性』とは何なのか。

普通に殴つて捕まえた。 それが通じないのであれば他に説明のしようがない。  
(あー、 めんでえ。 めんでえ。 めんでえ)

ぶつ殺そうかな、という考えが過ぎるが殺人が良くない事は理解している。

警察官をぶつ飛ばせば更に面倒ことが増える事も。

(そういうや。今のあたしが人を殴つたら死ぬつて言つてたつけ。……でも、あの泥野郎は生きてたよな)

彼女を『魔法少女』にした——らしい——小さな生き物が言つていた事だ。

本当に殴り殺せたのはアタスンモだけなのでいまいち実感が湧かない。けれども試す気も無かつた。

面倒ことは嫌いだし、タバコさえ吸えれば一先ずは平和であると自分では思つている。

「彼女の言葉が本当だとして……、この携帯端末はどう説明する?」

そう言つたのは側に居たプロヒーローの一人。真風羽に頼んで操作してもらつた。素直に従つてくれたので意外だと驚いた。

最新機種である事を除いてスマホ自体におかしなことはなく、操作にも特に——

彼女の使い慣れた操作によつて出された住所は警官立ち合いで確認すると確かに見知らぬ地名ばかり出てきた。

ネットを介した情報は遮断されており、ローカルに保存されている情報だけとはいえ真風羽の言葉に嘘が無い事は理解した。だが——

(現住所はこちらだと道路の上だつたり、住宅街になつてゐる。それと電話番号も通じない)

留守ではなく使われていない番号だつた。

それ以外で真風羽の保護者を特定する情報は出てこなかつた。  
(つまり……どういう事だ？ 嘘ではないが本当でもない？)

「……で、あたしの情報が無い場合は捕まるの？ 犯人を捕まえた正義の人を公務員は何の罪で捕まえるの？ 住所不定無職罪？」

敵意剥き出しで真風羽は警察に詰め寄る。

可愛らしい容姿を歪めた威嚇は中々に迫力がある。

(……警察のデータベースにも無いならあたしはどうすりやいいっての。頼れる知人が居るわけもなし)

学校に友人らしき者は居るには居るが——と真風羽はがつかりした気持ちを抱く。

少し興奮気味ではあるが思考は鮮明に物事を分析していく。

ここは似て非なる世界だ。

そんな予感がした。

見覚えがあるようで様々な違いがある。まず『個性』を持つ人間による活躍など真風羽の知る日本には無い。それとアタスンモが今も出てこない。

いつもは潰されにすぐ出てくる都合のいい敵だが、今もつて現れないところを見ると居ない世界に来たとしか言いようがない。

(そもそも圈外になるほど遠出はしちゃいないし。通信が遮断された事なんて無かつた)

情報化社会においてスマホは必需品だ。それが使えないのは残念だが。  
それにもまして今一番の懸念は——タバコを吸えない事だ。

"Plus Ultra"

一向に進展しない状況に真風羽は彼らの相手をするのはやめようかなと思い始めた。  
知らない土地であるならば何をしてても問題は無い。いつそ世界も潰してしまおうか、  
とまで――

普段であれば小うるさい珍生物が色々と手を回してくれるのだが、今は真風羽ただ一人。  
とても危険である。――世界にとつて。いや、地球にとつて。  
(タバコが吸いてえ。タバコが吸いてえ。タバコが吸いてえ)

面倒な手続きに付き合うのも我慢の限界だ、と言わんばかりだ。

そんな彼女の鬼気迫る迫力は既に周りにも伝播している。確実に——真風羽を長く留めるのは危険である、と。

しかし、公務員である警官達はすんなりと開放するわけにはいかない事情がある。

税金を貰つて仕事をしているので。だが、正直に言えば扱いに困っていた。

住所不定の女子高生を引き留めるにしても解放するにしても。しかも連絡手段は断たれている。

一時保護をして保護者か知人を捜索するとなると長く拘留することになる。だが——敵ヴァイランを捕まえた民間人を拘束するとなると警察への印象はますます悪くなる。ただでさえプロヒーローに頼りっぱなしで——世間に役に立たない税金泥棒と認識されているのである。

(……めんでえが……。その前に……。お腹が空いてきた)

魔法少女としての能力を十全に發揮していないとはいえ運動すれば腹が減る。特に真風羽は育ち盛りの女の子である。

周りに聞こえるくらいの音が腹から響き渡つた。

家に帰れば充分な食糧を得られるが、ここではそうはいかないと理解する。であればほぼ無一文同然の現状をどうすればいいのか——

無錢飲食は想定していない。適當な『敵』<sup>ダチ</sup>でも現れてくれれば集れるのだが、都合よく現れてくれるわけもなく。——少なくとも真風羽はそう思っている。

そんな現状を見ていた爆豪少年は氣を利かせて助けよう——という気持ちは湧かず、ただただ驚いたり呆れたりしていた。それは他の者も同様であつた。

プローヒーローが揃つて突つ立つてゐる。警察も然り。

真風羽はただ無意味な問答を強いられている。

もはや何を言われても右から左へ流れるが如く。

そこへ颯爽と現れる救いの手が――

しかし、都合よくそんな存在が現れる筈もなく、警官の尋問はしばらく続いた。

ただ、物陰からなんとかしようという気配があり、真風羽達の会話の内容も大体聞かれていた。しかし、それでも一步前に出る事が躊躇われていた。  
何故なら非番だつたからだ。

そう自分に言い訳をしているみつともないプローヒーローが居た。

元はと言えば――

(……どうしよう。かつてよく登場しようにも事件があつさり解決しちゃつた今はとて  
も出づらい)

それに体調も良くない今は療養が先決である。それと責任が自分にあるとはいえ手

柄を横取りするような真似をしては印象が悪くなる。——どちらにしても印象が悪くなる事には変わらないのだが——

そんな事を考えているのは病的なまでに痩せた人物だつた。

## No. 03みゆ 一 条件がある

物陰から真風羽達を見ていた人物はプロヒーローのみならず人々の羨望<sup>まじば</sup>の的<sup>まと</sup>。

No. 1ヒーローと名高い『オールマイト』——の本当の姿である。

ヒーローとしての彼は筋肉ムキムキだが、それは『マッスルフォーム』にて世間を欺<sup>あざむ</sup>いているに過ぎない。それには様々な訳があるのだが——

(……しかし、のこのこ出て行つたとしても周りが騒ぐだけだ。それに……今はオフだ)  
（わざわざ）  
態々忙しくする必要は無い。

—— そうなのだが、幾許かの罪悪感<sup>いくばく</sup>があつた。

そもそもで言えばヘドロの敵<sup>ヴァラン</sup>を取り逃がし、一般市民<sup>爆豪</sup>に危害を加える結果になつた。ちゃんと捕獲していれば今頃は何の混乱もなく事態は收拾したかも知れない。

結果論になつてしまふけれど、とオールマイトは事態の成り行きを見守つていた。

その彼<sup>オールマイト</sup>の側には爆豪<sup>ばくこう</sup>の友人らしき存在が居たが——

（しかし、見事な手際だった。何の『個性』かは知らないが……、ヒーローなのか？ そ  
うでなければ是非とも雄英に欲しい。他のプロヒーローも勧誘したくてうずうずして

いるようだ)

素行に問題があろうと正義を愛する者であれば門戸はいくらでも開かれる。

道を間違えた敵<sup>ヴァイラン</sup>は社会に馴染めない者が多い。ただ単に逮捕ばかりしていても根本原因が解消されたわけではない。

そうは思つてもオールマイトも現実的な思考でものを考える人間だ。

見物人が多くなり警察も安全確保が難しくなったことに気づいて移動することにした。

爆豪を解放した後、何人かのプローヒーが彼の側に駆け寄つたが上の空のようだった。

それはやはり真風羽の存在が気になつたから。

見た感じでは巻き込まれただけで爆豪を助ける気など微塵も無かつた。それは理解している。

問題は不可思議な『個性』だ。自分に無いものは気になる。

警官達から引き離れていく真風羽を爆豪は姿が見えなくなるまで見つめていた。それは敵意を向けるためではない。次は自分の力だけで解決してやる、という無言の宣戦布告であつた。

"Plus Ultra"

警察関係者と真風羽だけになつた所でオールマイトがマツスルフォームにて登場する。

筋肉がはちきれんばかりに膨張した文句が付けようがないヒーローとしての姿——

「私が来た」

ポーズを付けつつ警官にアピール。

それだけで安心したのか警官達はオールマイトを快く迎えた。ただ、一緒に居た真風羽は氣色悪い登場人物に辟易していた。

肉体美を見せびらかす人間に覚えがあるとはいえ、別に筋肉好きではない。

荒んだ人生を送つてきた真風羽にとつて色恋沙汰は未だ無縁であつた。

「……あ？」

(怖つ)

真風羽の睨みにさしものオールマイトも言葉に詰まる。それほど今の彼女の顔は恐ろしい形相に見えた。

ただの女子高生である筈なのにここまで憤怒を形作れるものかと。

彼のみならず警官達も息が詰まる思いだつた。

「……えーと。とりあえず、敵<sup>ヴィラン</sup>相手によく無事だつたね。何の『個性』か知らないけれど……」

勇気を出して会いに来てみたけれど、真風羽が物凄い怖い顔をしているので口がうまく回らない。

オールマイトをして真風羽は未知の敵で、そう思わせる圧倒的な雰囲気があった。

人を見た目で判断してはいけないのだが実際に目にすると足がすくむほど彼女は恐ろしい気配をまとっていた。

単なる女子高生にここまで相手を畏怖させる力があるものなのか、と。  
だが。

それほどの力を悪に向かわせることはプローヒーローであるオールマイトには出来ない。先ほど話していた彼とて正式なヒーローになれば化けるかもしねれない。

世間を賑わせる本物のヒーローに――

それらは結局のところ本人次第だが。  
オールマイトとて過剰な期待はしていない。だが、それでも自分はヒーローだ。  
世間の期待に応えないわけにはいかない。

「なんだオツサン。あたしに説教垂れに来たのか?」

「……む。そういうわけじゃないけれど……。困っている者を見捨てるほど私も落ちぶ  
れてはいいって話しさ」

軽く話題を切つて警官達から詳細な話を聞いておく。その間、出来る限り真風羽の  
顔を見ないようにした。何故か今は物凄い怖い顔をしていたので。

誰も居なければ脂汗だけで何キログラム痩せられるか。

とにかく、迂闊な発言は命にかかるわりそuddoと本能の部分で警告していた。たかが女  
子高生なのに――

頭ではそう思つていた。

(なんて恐ろしい負のオーラなんだい。可視化されたら辺りが真っ暗になるんじやない  
か?)

(腹減つたな……。カツ丼くらい出してくれりやあいいものをよ)

相手を恐怖に陥れる真風羽も本人としては空腹による不機嫌に過ぎなかつた。もち  
ろんタバコが吸えない事も原因の一つではある。

真風羽はとにかく——女子高生の身ではあるが——食欲旺盛で——健康的とは言い難いが——美味しいものに目が無い。

こことは違う本来の居場所では『舍弟らしきもの』<sup>ダチ</sup>が作る料理を楽しみにしていた。あと、奢つてくれるのであれば例え敵でも友好を結べる。

世間一般で言うところの『ツンデレ』属性を持ち、燐<sup>おだ</sup>てられると団に乗るタイプである。

——信じられないかも知れないが。

彼女と会話を——無事に——交わせたならばその意外性に驚くこと請け合いである。ただ、容赦の無さは変わらない。

「……ただ、正直な話しつづけ……。君の様な超常の力を持つ者を野放しには出来ない。このままだと逮捕されるおそれがある」

「…………」

この世界では『個性』を持つ者は能力を無暗に使用してはいけない、という法律が制定されている。これは『無個性』の一般市民も居るからなのと——

世間に迷惑をかける『敵』<sup>ヴァイラン</sup>の存在が大きい。

## 敵とは何か―― ヴィラン

端的に言つてしまえば『個性』を悪用する者達の総称で特定の組織の名称ではない。他人よりも優勢となる能力を自由に勝手気のままに使いたい人の業ともいえる。その気持ちは理解できないわけではないが迷惑を被るのは無力な一般市民だ。それゆえに法律で使用を制限している。

迷惑が掛からなければ使つてもいい『個性』は存在する。身近な例えでは建築関係だ。オールマイトのよう<sup>ヴィラン</sup>に敵を倒す事に特化したプローヒーロー。こちらは主に人命救助系も含まれる。

「お互い納得する形を取る上で……、雄英高に体験入学という形で来てみないか?」  
「……学校は嫌いなんだけどな」

先ほどの殺意の様な威圧から恥じらいの雰囲気へ。

憤怒から照れに変わった瞬間に場の緊張が解けた。それは目に見えて驚くべき変化であった。

年相応の可憐な華がそこに出現した。信じられない事に誰の目にも真風羽がとても可愛い女の子に見えたのだ。

「話を聞く限り、君は迷子のようだし……。君が通っていた学校もここには無い」  
(私立聖的高校……。本当に学校名なのか? 字面だけ見るとまともそうなのに……)。

こんな女子が通つてゐるんだ。きっとロクデモない所なんだろうな)

「……そららしいな。なんでなんかは知らねえけど

「いきなり入学させることはいくら私でも無理だが……。『個性』というものが何なのか理解してからでも遅くはないし、何らかのきっかけになるかもしない。……それともここで臭い飯でも食うかね？」

いくらプロヒーローとはいえ全ての面倒は見れない。自分に出来る範囲の事しか提示できない。後は本人次第――

多少は無責任になつてしまふけれど、それがヒーローとしての常識である。

『個性』は万能ではない。使い方を誤れば警察の厄介にしかならないものだ。であれば現状を打破するヒントくらいは提示しなければ後味が悪くなる。

——言葉をいくら着飾つても責任転嫁でしかない。主に自分の失態への――

寝覚めが悪い、という理由もある。それといつまでも拘束していると何が起きるか分からぬ。

「行つてもいいが……、条件がある」

「……オールマイト謎の筋肉の提示に対し、いつまでも警官と睨めっこしたくない思いがあつた真風羽は言つた。

ヒーローだの個性だの言われていたがさっぱり理解できない。誰か教えてくれるの

であれば願つたりである。しかし、それだけでは満足できないのもまた恼ましい処だ。

一つは食事。主に衣食住の問題。

もう一つはタバコである。これが満たされないと話しが進まない。

場合によれば平和的な会話をしなければならなくなる。

「常識の範囲で頼むよ」

「あたしはタバコが好きな女子高生だ。それが無ければ誰か殺つちまいそうになるほどに……」

(た、タバコ!? それはさすがの私でも駄目だと……)

「銘柄は特に指定しない。あんたらの言う個性? それで量産してくれればいい。要は……タバコさえ吸えればいい。無ければ作れ。それが条件だ」

上目遣いで真風羽は言つた。

ニタアと邪悪な擬音が聞こえそうな不気味な笑みを浮かべて。

側に警官が居るのにもかかわらず、この条件を提示してきた度胸はオールマイトといえどもたじろぐ程——

彼女はいつたい何者なのか、頗る気になるが出された条件を満たなければ警官に連れていかれる運命だ。

名も知らぬ一般人を救つた謎の女子高生がただの素行不良を理由に——

ヴァイラン

敵の脅威を払つた筈の女子高生が逮捕。

問題なのは警官達の目の前でタバコを吸つた現行犯ではない。ただの要望だ。それだけでは逮捕に足りえない。

それともし『無個性』であれば逮捕はもちろん不當に当たる。その場合、警官達の立場が悪くなるのは明白だ。

「……難しい事を……」

「既製品を持つてこい、という条件なら難しいだろうな。側にポリが居るわけだし。で？ それを分かつた上で頼んでいるあたしの条件をおっさんは満たせないわけ？ 何しに来たんだ？」自慢？ 悪いけど、筋肉に用は無いんだけど」

平然と宣う真風羽に対し、警官のみならずオールマイトは苦境に立たされる。

口の利き方が悪いだけで逮捕は出来ない。暴力も振るつていない。

真風羽はただその場に立ち尽くし、自分の要望を言つてているだけだ。

ただそれだけの相手に対してもできない。

(ホントに何しに来たんだか……。この子の言うとおりだ)

『個性』でタバコをどうにかする能力に覚えは無い。けれども何らかの条件を満たすことは——おそらく——可能だ。

それはそれで色々と問題があるけれど、悪の道に進ませない為であれば多少の問題は

呑まなければならぬ。

まだ金銭の要求の方が楽だったのでは、と思わせる。

「期待に応えられない場合がある」

（本当なら期待に応えられると自信を持つて言わなければならぬところだ。だが、内容が内容だ。いくら私でも出来ない事はある。しかし、タバコとは……。この子はどういう育ち方をしたんだろうか）

「あたしも見知らぬ土地で困つていたところだ。衣食住もついでに叶えてくれると助かる」

「そつちをメインにしてくれよ」

「はっ？ あたしにとつてタバコこそが一番だ。それは譲れねえな」

オールマイトイ怯まない真風羽。それは彼女が彼の事を全く知らない人間である証拠。

警官達の目には信じられない小さなモンスターに映り、始終口をパクパクと動かすのみだ。

普段であれば目上の存在に対する態度を改めるように説教をしているところだ。それが出来ないのは真風羽の言い知れない邪悪なオーラのせいか。

"Plus Ultra"

オールマイトという全身筋肉で出来たような人物は勢いで高校名を出してしまった事に後悔やむことになった。彼は個人事務所を持つていなかつた。それと自分も赴任予定だつたので、つい――

通常であれば事務所への勧誘だけで責任は随分と小さくなる。

(……しかし、タバコをどうしても譲らない女の子なんて初めてだ。健康面からも道徳的にも許されない気がするんだが……)

場を早く治めなければならぬ焦りか、冷静な判断力があれば余計な失態を演じずにいられたのだが、既に後の祭りである。

要望を検討すると答えただけで真風羽がいやに素直に言う事を聞くようになつた。

暴れられるよりはマシなのだが、どうにも不安が拭えない。それは多くの悪人と接してきた経験則から来る危機意識か。

元々事情聴取と言つても真風羽の個人情報以外は既に済んでいる。後は彼女の振る舞いだけだつた。それに未知の『個性』にも興味があつた。

少なくとも流動する肉体を持つ凶悪な敵を苦も無く捕らえたのだ。しかも周りへの被害も物損のみ。こちらは真風羽の物理攻撃によるものだが、一般人の被害が軽微なので不間に出来るレベルだ。

とりあえず。

真風羽を目的の高校に案内することにした。

正直な話し、入学は方便で事態の沈静化こそが目的だ。後の事は他の知恵者に任せたいとオールマイトなりの目的があつた。

「それでデンジャラスガール。君の名前はなんというんだ？ 私はオールマイトと呼ばれている。ヒーローは通り名で活動するものだから本名は基本的に名乗らない」

多少の見物人の視線を受けつつ雄英高校に向けて歩き出した時の事である。  
名前自体はこつそりと聞いていたが改めて聞くことにした。ついでに自分の宣伝も兼ねて。それと自分の失態は恥ずかしいので聞かれない限り言わない事にしておいた。  
(私は世間が思っているよりもシャイなのだよ。だが、嘘をつくことと隠すことは違うからね)

「真風羽華代」

(マジバカよ？ 酷い名前だ。昨今流行りのキラキラネーム？)  
（区切りを間違えれば確かにそう聞こえても不思議は無い。）

ヒーローネームもキラキラネームに近いので名前についての言及は避けた。

高校に案内する以外の選択について——彼女の自宅住所が存在しない以上放置も出来ない。それゆえに仮<sup>一時避難的な意味</sup>初の宿舎を与えないわけにはいかない。

聞けばキャッシュレス。端末に記された個人情報も当てにならない。更にネットにも繋げる事が出来ない。

出来る事はせいぜい充電くらいだ。こちらは規格が違うという事は無かつた。だが、使えないのは変わらない。

“Plus Ultra”

家出というわけではなく、どういう訳か宿無しとなつた真風羽に独居房を与えるわけにはいかない。人助けした人間なら尚のこと。

数か月後に雄英高校は入試を控えている。だが、真風羽を本気で入学させる所までは考えていない。

何らかの線引きが必要なので本人の意思次第ではひとつそりと退場してもらうつもり

だつた。

(大人の世界は醜く汚いものだ。ヒーローとて例外ではない。……だけど、磨けば光るものを持つてゐるならば大人はそれを後押ししなければ格好悪いじやないか) 人伝に聞いた程度だが、真風羽が邪悪な人間であることは理解した。そんな危険人物を野放しにするよりは多くの事を学べる場所に放り込んだ方が得策ではないかと考えた。

けれどもプロヒーローは忙しい。ずっと彼女につきつきりで居る事は出来ない。

(しかし急に大人しくなつたな。……いや、物凄く腹の音が鳴つてゐる。早く何か食べさせないと危険だ、という信号かもしぬれない)

空腹だから大人しくしてゐる。そう感じたオールマイトは買い物帰りだつた事もあり、手持ちの飲み物を一つ与えた。

高校の食堂には学食があるから、それまで我慢してもらうことを告げておく。

「……」

見知らぬ世界——土地かは分からぬけれど、真風羽はタバコが吸えない事ばかりが頭の中にある、食べ物は二番目くらいだつた。それゆえかあまり状況に対して不安を抱いていられない。

ただでさえ毎日のようにアタスンモが襲つてきたのだから平静である今の時間帯は

久方ぶりの休日の様な感じだつた。

満たされない日常というものがあり、充実感すら記憶の彼方。では今はどうなのか――

賑やかさでは前の世界とそれほど変わらないが、煩い面々が居ないだけ静かだと見える。

(……買い物とかできないし、寝泊りもどうしようか。ポリの厄介になるのはめんでえ) 極端な不安は無いけれど極端な苛立ちが無い分、まだましだと思った。

側に居る筋肉の塊については興味が無かつたので未だに話しかけていない。

会話らしいものも無く、案内されるまま辿り着いたのは学校だ。それも規模の大きい

「ここ」が雄英高校だ。一度入れば勝手に外出は出来ないけれど過ごす分には快適だと思う。それで君はこのまま引き返すか、それともヒーローへの道を目指すか。それ以外か……

「……寝泊りするだけじゃねえのか?」

「それはあくまで君の自宅が判明するまでの間だ。この学校についての知識は?」

「無い」

この地域ではかなり有名な筈なのに、とオールマイトは首を傾げる。

ヒーローについても知らなさそうな人間に出会ったことが無いので、どう答えればいいのか分からぬ。

だが、なし崩し的に連れてきてしまった以上は最低限の情報を提供しなければ、とう思いがある。

いきなり教室に案内することはせず、校長室に向かうこととした。